



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

2

質的研究のための 「インター・ビュー」

スタイナー・クヴァール

能智正博・徳田治子 [訳]

インタビューとは、まなざし／見解の間
(インター・ビュー) において生じる営みであり、
その相互行為のなかで
知識が作られる現場である——

インタビュー実践の具体的なノウハウを余すところなく伝えつつ、
質的研究におけるインタビューのあり方を広がりとおもひをもって考察。
インタビュー研究の初心者がまず読むべき入門書であるだけでなく、
経験者にとっても、実践を振り返り発展させる契機となる一冊。

新曜社



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

2

質的研究のための 「インター・ビュー」

スタイナー・クヴァール
能智正博・徳田治子 [訳]

新曜社

DOING INTERVIEWS
Steinar Kvale
SAGE Qualitative Research Kit 2

Copyright © Steinar Kvale 2007. All rights reserved.
This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.



编者から ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は、全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地から研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネ

ス研究、経営研究、認知科学等の質的研究の実践者たち。

- こうした分野で質的手法を使用する大学教員。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の学部生と大学院生。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の方法的視点と著者が述べるアプローチから取り込まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の一つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって——経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り込まれるかもしれない。

- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって——これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通するいくつかの特徴を挙げることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。
- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプロ

チが開発される。

- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（ウヴェ・フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図している。この本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実際的な諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。
- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「イン

ター・ビュー』(スタイナー・クヴァール)は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』(マイケル・アングロシーノ)は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題(サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題)が、より一般的な諸問題(倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性)の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』(ロザリン・バーバー)では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。

- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』(マーカス・バンクス)は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている(インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて)。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実際的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的研究におけるデータ分析』(グラハム・R・ギブズ)では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実際的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用に、注意が払われている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』(ティム・ラプリー)では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実際的な問題が考察される。
- 『質的研究の「質」管理』(ウヴェ・フリック)は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマ

の文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについて現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるという文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいたSAGE社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げしてくれた。



本書について

ウヴェ・フリック

インタビューは、質的研究においてデータを収集する際に用いられる主要なアプローチの1つである。さまざまな目標と原理をもつインタビューをどのように実施するか、私たちは多様なやり方を知っている。しかし同時に、インタビューを実施するには、インタビューに関わるすべての手順に共通した長所や慣習や難しさが数多く伴うものである。インタビューの実施に関しては、異なる観点から——たとえば理論的、認識論的、倫理的、実践的な観点から——論じることができる。また、ひとたびインタビューが実施された後には、次のようなステップが待っている。まずは、そのインタビューで聞き取った内容を記録する具体的な方法として文字起こしが必要で、そのルールが問題となる。続いて、インタビューのデータに質的な分析を施すために、具体的な方法が求められる。インタビューを実施するとさらに、インタビュー全般の質——特にその妥当性——を高める必要性が生まれるほか、何が語られそれをどのように分析したかについて最終的に報告することも必要になる。

本書は、インタビューを行なうためのこうした問題のすべてを、きわめて詳細に扱っている。本書の土台には、インタビューを実施したり、インタビューとその実践について執筆したりしてきた筆者の長い経験がある。「SAGE 質的研究キット」の一冊として、本書はデータ収集を中心的なテーマにしているが、この特定のかたちのデータを分析し評価する際の具体的な問題にも注目している。

本書で述べられていることを補うのに、質的研究キットの他の何冊かが役立つだろう。とりわけ、質的データの分析を扱っているギブズ (Gibbs, 2007) やディスコース分析や会話分析をテーマとするラプリー (Rapley, 2007) は、インタビュー（およびその他のデータ源）から得られた質的データを分析する方法について、より多くの情報をもたらしてくれる。フリック (Flick, 2007a) は、質的研究を計画しデザインすること（および、インタビューを行なうこと）の

詳細に踏み込んでいる。また、質的研究の質に関する諸問題は本書のテーマでもあるが、フリック（2007b）は質的研究の質の管理をテーマとした巻においてさらに詳しく議論している。データ収集に関する別の、ないし追加的な方法は、質的研究キットの他の巻に素描されている。たとえばアングロシーノ（Angrosino, 2007）は、参与観察とエスノグラフィーを（そこでのインタビューの利用も含めて）紹介している。バーバー（Barbour, 2007）は、1対1のインタビューに代わるものとして、フォーカスグループについてさらに詳しく論じている。また、バンクス（Banks, 2007）がより詳細に議論しているのは、ビジュアルデータの使用についてである。



はじめに

本書のねらい

インタビュー調査はある種の職人技^[訳注]* (craft) であり、その技は実際にインタビューを実施しながら習得される。本書では、インタビュー実践を実地に学んでいくための準備として、インタビューを用いた探求をいかに行なうかという実践的な課題に関し、調査の開始から最終レポートの執筆まで、具体例とガイドラインを示しながら解説する。また、調査インタビューの実施について理解するための概念的枠組みを示した上で、質的なインタビュー研究で生じる認識論的・倫理的問題についても議論していく。

質的な調査インタビューが試みているのは、対象者の視点に立って世界を理解し、人々の経験の意味を明らかにし、科学的説明に先立つ体験世界の様相を明らかにすることである。本書では、社会科学における質的研究の豊かさと、その適用範囲について整理していく。そこで重視されるのは、インタビューが生成する知識の実践的な使用価値の問題、そして、研究のためにインタビューの会話を用いることでもたらされる倫理的な課題である。

インタビューとは、インタビュアーとインタビュイーの相互作用を通して知を生成する、会話の特殊な形式である。本書では、調査インタビューを哲学的対話や心理療法における面接といった他の会話形式と比較しつつ、ナラティブ・インタビュー、事実探求型インタビュー、フォーカスグループ・インタビュー、直面的インタビューといったさまざまな調査インタビューの形態についても解説する。なお、インタビューという会話それ自体は、より大きな調査プロセスの一段階である。たとえば、インタビューを用いた探求にはインタビューに先立つ諸段階、つまり研究テーマの明確化や研究プロジェクトのデザインが含まれるし、さらにはインタビュー後の、文字起こし、分析、インタビュー結果の検証と報告といった段階も存在する。

[訳注] 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

社会科学において、質的インタビューが組織だったやり方で適用され始めたのは比較的最近のことであり、この試みの適否についてはまだ議論も多い。会話を研究のために用いることの認識論にまつわる問題については、知に関する伝統的な考え方と最近の考え方に関連させて論じるつもりである。本書を通じて指摘したいのは、インタビューを用いた探求を進めるなかで解決すべき実践的な課題が、どれほど認識論的な前提に埋め込まれており、どれほど倫理的な面に影響をもたらすのかという点である。こうした議論は、誘導的な質問の妥当性の問題に始まり、公開を前提にプライベートな内容についてインタビューすることをめぐる倫理的な懸念にまで及んでいる。

本書の構成

インタビュー実践に求められる職人技は、インタビューを実際に行なうことによって習得されるものであり、本を読むだけでは身につけることはできない。しかしながら、調査インタビューの実施を通じて蓄積された経験が本に書かれるなら、そこには、さまざまなインタビューの具体例やインタビュー実践から凝縮された、有用なガイドラインが要約されることになる。本書では、私の経験、私の指導学生の経験、そしてインタビュー文献で報告されてきた他の研究者の経験をもとに、インタビュー実践から得られるものやそこから引き出されるガイドラインを紹介していく。また、実際にインタビューを実施する代わりにインタビューの事例を用いて、会話をを用いて研究する際に現れてくる多くの実践的、概念的の問題の一部を解説する。後に続く章では、一見神秘的にも見えるインタビューの職人技を具体的な段階に分け、事例を示し、そこに含まれる技術的、概念的、そして倫理的な問題を指摘していく。

最初の章では、調査インタビューの例をいくつか示した後、調査インタビューの利用をめぐる歴史を概観する。次の2つの章では、会話をを用いて研究することによって生じる認識論的・倫理的問題について述べる。その後の章では、実践的なレベルの説明として、インタビュー調査における7つの段階を1つひとつ示しながら解説していく。まず、調査のテーマを設定して研究の目的を明確化するインタビュー前の段階から始め、続いて、インタビュー調査全体をデザインする段階について述べる。実際のインタビューの場面については3章に分けて、生活世界に関する半構造化インタビュー*の実施の仕方、さまざまなインタビューの形式、インタビューの質といった題材を扱う。その後、文

字起こし、分析、妥当性の確認、一般化、結果の報告といったインタビュー後の諸段階について述べていく。

本書の焦点

本書の主な焦点はインタビュー実施それ自体にあり、実施前後の段階はもっぱら、それがインタビュー状況に対してもっている意味という観点から扱われる。本書を通して強調されるのは、インタビューを用いた探求の各段階が相互に関係しあっているということである。インタビュー調査の1つの段階で行なった決定が、いかに他の段階での選択肢を広げたり狭めたりするかという点は、繰り返し指摘されるだろう。そこで研究者の方々には、インタビューという旅のどの段階にあっても、研究プロセス全体を思い描いておくようお勧めしたい。

以下の章において私が試みるのは、インタビュアーの専門性とスキルと職人性 (craftsmanship) に焦点をあてることによって、「方法がすべて」的なアプローチに見られる厳密で客観的な構造を重視する怪物と、「方法は必要なし」的なアプローチの自由で主観的な自発性を重視する別の怪物のはざまを、うまく舵取りしながら進むことである。インタビュー実践とは、インタビューを実際に行なうことを通して習得される職人技であり、理想的に言えば、経験豊かなインタビュー研究の先達がいる実践共同体のなかで徒弟修行期間を過ごすことによって身につけるべきものである。本書は、読者に演習を通して調査インタビューの実際を学ぶための準備をしてもらうこと、そして、インタビュー実践とそこで生成される知について議論するための概念的枠組みを提供することを目標としている。本書を読み終えた読者は、インタビュー研究に関する以下のような問いに対して、概念的に答える準備が整うだろう。

- インタビュー調査の認識論的問題をどのように理解するか (2章)
- インタビュー実施に関わる倫理的問題にどのように対処するか (3章)
- インタビュー研究をどのようにデザインするか (4章)
- 調査インタビューをどのように計画・実施するか (5章)
- インタビュー法のさまざまなタイプを、どのように選択するか (6章)
- インタビューの質をどのように評価するか (7章)
- インタビューの逐語録をどのように作成するか (8章)

- インタビューをどのように分析するか (9章)
- インタビューによって生成される知識をどのように検証するか (10章)
- インタビューをどのように報告するか (11章)

インタビューの実践を学ぶにあたってのエクササイズ

インタビューの実践を職人技が習得されるように学ぼうとする読者は、ただちに、あるいは遅くとも1～3章という導入的で概念的な章を読み終えたら、この本を閉じて次の課題を実行するとよい。

調査インタビューの録音を3つ入手し、1週間ほどかけてそれを文字起こす。その際、文字起こしとインタビュー実践のプロセスについて、また、その難しさについて、よく考えてみる。

読者が本書で示される実際的なハウツーを学び始めるのは、そうした実地の経験をした後で差し支えない。みなさんはおそらく、以下のページで書かれていることの多くを、その経験を通じてすでに学んでいることに気づくことだろう。期待される学習成果の一端は、本書の最終章にある「ボックス 12.1 逐語録の作成を通してインタビュー実践を学ぶ」に掲載している。

逐語録を作る演習をせずに本書を読み進めることを選択する読者には、次のことを強く勧めたい。それは、本番のインタビュー・プロジェクトに取り組む前に、予備調査のかたちでインタビュー実践の訓練を行なうこと、理想的には、経験豊かな研究者のインタビュー・プロジェクトに見習いとして参加し、学びを進めていくことである。



謝 辞

本書は調査インタビューの実践を扱っているが、本書のもとになっているのは、1996年刊のより詳細な著書、*InterViews — an Introduction to Qualitative Research Interviews* (『インター・ビュー：質的調査インタビュー入門』)である。本書は、調査インタビュー実践のハウツウ的側面にいっそう焦点化した簡潔なものとなっており、より新しい文献の引用も増やしている。本書ではまた、前著のように共感的で合意的なインタビューを重視するだけではなく、アクティヴで直面的なインタビューについても議論したほか、意味に注目したインタビュー分析を概観することに加えて、言語形式に焦点化した分析にも視野を広げた。さらに今回の本では、インタビュー実践を学ぶためにインタビューを職人技として理解することの帰結を、いっそう詳しく述べている。

本書の土台になったのは、インタビュー調査を実施し、教育し、指導してきた私の体験であり、同時に、学生たちや授業の共同教員である T. K. ジェンセンから得たインスピレーションである。本書の原稿を準備する段階で、特に、E. H. ブラガソン、S. ブリンクマン、P. ドーン、M. N. ヘンリクセン、B. ラセーセン、P. ハール、そして妻である T. ソーグスタッドから有益なコメントをもらった。また秘書の L. ハンセンには、原稿のおびただしい書き直しをなんとかまとめてくれたことに対して心より感謝したい。

スタイナー・クヴァール

目次

編者から（ウヴェ・フリック）	i
「SAGE 質的研究キット」の紹介	i
質的研究とは何か	ii
質的研究をどのように行うか	iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲	iv
本書について（ウヴェ・フリック）	vii
はじめに	ix
本書のねらい	ix
本書の構成	x
本書の焦点	xi
謝辞	xiii
1章 インタビュー調査とはじめ	1
3つのインタビュー事例	1
歴史と社会科学のなかでのインタビュー調査	6
方法論的・倫理的諸問題	10
2章 インタビュー実践の認識論に関わる問題	17
質的な調査インタビューにおける理解の様式	17
質的な調査インタビューにおける力関係の不均衡	22
哲学的対話と臨床面接の間に位置する調査インタビュー	23
インタビュアーは鉦夫か旅人か	28
インタビューの知に関わる認識論	30
3章 インタビュー実践の倫理的課題	37
道徳的探求としてのインタビュー実践	37
インタビュー研究全体を通じた倫理的課題	38
倫理ガイドライン	40

	インタビュー調査におけるミクロな倫理とマクロな倫理	46
4 章	インタビュー調査を計画する —————	53
	インタビューを使った探求の7段階	54
	インタビュー調査のテーマ設定	58
	インタビュー調査のデザイン	63
	混合法	69
	方法と職人技のはざまにあるインタビュー実践	72
5 章	インタビューを実施する —————	79
	成績について教室で行なわれたインタビュー	80
	インタビューの場の設定	84
	インタビューの台本作り	86
	インタビュアーの問い	90
	追加質問の技法	95
6 章	インタビューの多様なかたち —————	101
	インタビューの対象者	101
	インタビューの諸形式	105
	直面的なインタビュー	112
7 章	インタビューの質 —————	121
	ハムレットのインタビュー	122
	インタビューの質	124
	すぐれたインタビュアーであるための条件	125
	インタビュー調査の質に関してありがちな異論	129
	誘導的な質問	133
	学術的責任と倫理的責任の緊張	135
8 章	インタビューを文字に起こす —————	141
	話し言葉と書き言葉	141
	インタビューを記録する	143
	インタビューの文字起こし	144
	文字起こしの信頼性と妥当性	148
	インタビューの分析のためのコンピュータ・ツール	150

9章	インタビューを分析する	155
	インタビューの分析をインタビュー研究に統合する	156
	分析の諸様式	158
	意味に注目した分析	159
	言語形式に注目した分析	165
	プリコラージュとしてのインタビュー分析	173
	理論的な読みとしてのインタビュー分析	175
10章	インタビューから得られた知の妥当化と一般化	185
	インタビューから得られた知の客観性 <small>オブジェクティヴィティ</small>	185
	インタビューから得られた知の信頼性と妥当性	187
	職人性の質としての妥当性	189
	コミュニケーションによる妥当性とプラグマティックな妥当性	191
	インタビュー調査からの一般化	193
11章	インタビューの知を報告する	199
	インタビューの報告の対照的な受け取り手	199
	インタビューの報告を仕上げる	201
	インタビューの報告の質を高める	204
12章	インタビューの質のさらなる向上に向けて	209
	インタビュー実践の職人技を学ぶ	210
	インタビューの知の価値	214
	インタビューの知の認識論と倫理についての概念	216

訳者あとがき 223

用語解説 227

文献 235

人名索引 241

事項索引 242

装幀 = 新曜社デザイン室

ボックスと図表リスト

ボックス

1.1	成績評価に関するインタビュー	2
1.2	チームワークに関するインタビュー	3
1.3	2人の若者とのインタビュー	4
2.1	質的な調査インタビューにおける力の不均衡	22
2.2	エロスに関する哲学的対話	24
2.3	憎しみに関する臨床面接	25
3.1	7つの研究段階における倫理的課題	38
3.2	インタビュー研究の開始時における倫理的問い	41
4.1	インタビューという旅における感情の力動	54
4.2	インタビュー研究の7段階	56
4.3	成績評価の研究の7段階	57
5.1	デモンストレーション・インタビュー	80
5.2	インタビューでの質問	91
5.3	質問の言語形式	94
5.4	追加質問	95
6.1	子どもに対してピアジェが行なった夢についてのインタビュー	103
6.2	ある職人のナラティブ	108
6.3	能動的で挑戦的なインタビュー	113
7.1	ハムレットのインタビュー	122
7.2	インタビューの質を評価する基準	124
7.3	すぐれたインタビュアーであるための条件	125
7.4	すれ違うインタビュー談話	127
7.5	質的なインタビューに対するありがちな批判	129
8.1	会話分析のための文字起こし	146
9.1	分析の6段階	156
9.2	インタビューの分析におけるデータに即した技法の例	173
11.1	最終報告を念頭に研究を進める	201
12.1	逐語録の作成を通してインタビュー実践を学ぶ	210
12.2	インタビュー実習	212
12.3	インタビュー調査に対する内部からの批判	214